5　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ゆうぐれ、川原の土手の草のなかに、ぼんやりと寝ころんでいた。見あげる空が突きぬけてひろかった。

川水の音を聞きながら、ぼくは考えた。空のふかさについて。そのふかさにつもる時間について。時間のひとすみにうごめく人間について。

そしたら思わず嘘がでて、ぼくというちっぽけな人間なんか、世にもつまらなく思われた。そこらにころがっている木の根っこと変わりがない。そんなふうにして、ぼくはたそがれてゆく空のかげりを長いあいだ眺めていた。このまま木の根っこになってしまえばよい。わざと、木の根っこのふりして、じっとしていた。

ところが、やぶ蚊が一匹二匹と耳もとでうなり声を立てはじめた。ズボンからはみでた足を喰われて、ぼくはもじもじと軀をうごかし、ほとんど木の根っこの状態を中止しようとした。すると頭のうえをヒュッと掠めたものがある。うす闇にまぎれて見えなくなったと思うと、またくるりと向きを変え、ぼくのうえをヒュッと通る。一匹の中型のヤンマ(注)だった。きっと蚊をとっているのだろう、電光形にジグザグのコースをとりながら、忙しくあたりを飛びまわっている。ぼくはじっと息をころした。ヤンマをおどかさないように、ふたたび木の根っこと化したのだ。

そのうち、おどろいたことに、ぼくのまわりから蚊のうなり声がまったく聞こえなくなってしまった。みんなヤンマが食べてしまったのだろう。ヤンマはぼくの鼻先すれすれにピュッと通りぬけたり、危うくぼくの腹にぶつかりそうになっては翅音をたてて方向を変えたりした。それを見ていたら、ぼくはなんだか悲しくなってきた。ヤンマもやっぱり、ぼくのことを木の根っこのように扱ったからだ。ぼくはもぞもぞと身体を起こして、枯れ草のくっついたズボンをはたきながら立ちあがった。ヤンマはびっくりして、もちろんどこかへ消えて見えなくなった。

（北杜夫「少年」による。）

（注）　ヤンマ＝大きいトンボの総称。

一　――線部「悲しくなってきた」とありますが、「ぼく」はなぜ「悲しくなってきた」のですか。次の1から4までのうち、最も適切なものを一つ選びなさい。

1　やぶ蚊がヤンマに食べられてしまい、周りに何もいなくなったと感じたから。
2　やぶ蚊すら捕まえることができない自分を役に立たないものと感じたから。
3　ヤンマからも自分はつまらないもののように扱われていると感じたから。
4　ヤンマの邪魔をしないようにしていたのに、おどかしてしまったと感じたから。

二　この文章の表現の特徴として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

1　「ぼく」の体験や思いが「ぼく」自身が語る形で描かれており、気持ちの変化が想像しやすくなっている。
2　「ぼく」の考えや感じたことが会話を多く用いて描かれており、登場人物の関係が想像しやすくなっている。
3　「ぼく」の周りの出来事が「ぼく」の感情を交えずに描かれており、自然の厳しさが想像しやすくなっている。
4　「ぼく」の言動が「です」「ます」というていねいな表現で描かれており、穏やかな雰囲気が想像しやすくなっている。